

フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策（三）

——支那事変を中心に——

ワシーリー・モロジャコフ

要旨 本論文は、支那事変を中心に、日本の大陸政策・植民地政策に対するフランス知識人の見解を調査・分析するものである。列強の政府と政治エリートたちが、満州・中国での日本の行為を「侵略」と非難した際、欧米の世論とメディアはほとんど全て反日になった。フランス政府と政界も日本の政策を非難したが、知識人の見解は分かれた。その一部は日本の行動を弁護し、支持した。本論文では、この二つの派閥それぞれについて、フランス人政治評論家・作家の著作を検討する。

キーワード…日本、フランス、中国、大陸政策、植民地政策

支那事変と一般的に呼ばれた日中戦争の勃発（一九三七年七月）は、西洋における日本のイメージに強い影響を及ぼした。満州事変、関東軍による満州国設立、国際連盟脱退以降、またその結果として、国際政治体制における日本の地位は孤立に近いものとなった。そのため日本は、西洋向けの広報・イメージ結成活動を強化した。しかし、西洋における親日派の動力が全て「日本のプロパガンダ」によるものだと見るのは、必ずしも正確ではない。自発的に日本側を支持する知識人もいたのである。その代表的な人物は、世界的に著名なフランス人小説家で、一九三五年からア

カデミー・フランセーズの会員でもあったクロード・ファレール (Claude Farrère; 1876-1957) である。

クロード・ファレールと日本の出会い

「クロード・ファレール」のペン・ネームで知られるこの人物は、本名をフレドリック・シャルル・バルゴースと言
い、リヨンで陸軍大佐の家に生まれた。⁽¹⁾ 一八八〇〜一八九〇年代のフランスはジャポニズム(日本趣味)の時代であっ
た。東アジアを訪問した彼の父親は、中国と日本からきれいな陶器を持ち帰った。それらの陶器は、少年時代のフレ
ドリックの日本観、日本文化・美術に対するシンパシーの出発点となった。少なくともファレール自身はそう語って
いる。

若きフレドリック・バルゴースは、一八九四年にフランス海軍大学校に入学して、同級生の日本人「プリンス・マ
ツイ・ジンザブロ」(原文で「prince Matsui Zinzaburo」)と友人になった。⁽²⁾ 「プリンス・マツイ・ジンザブロ」が誰を
指すのか、どのような人物であったか、詳らかでない。時期は日清戦争勃発のころであった。海軍大学校の同級生、
先輩や教師は日本海軍と中国海軍の軍艦数及び砲兵を比較分析した結果、いずれも中国の勝利を予測した。それはフ
ランス海軍ばかりではない。ヨーロッパの海軍や軍事評論家のほとんどがそう考えた。しかし、結果的に「日本側の
戦術と精力は戦闘に勝った」。⁽³⁾ バルゴースは、まだ「小説家・ファレール」になっっていなかったが、海軍の人間として
日本に対して特別な関心を持ち始めていた。

一八九七年に海軍大学校を卒業したバルゴースは海軍士官となり、同年秋からインドシナで勤務した。彼はその際、
フランス・インドシナ各地ばかりでなく、フィリピン、香港、中国、朝鮮、台湾などを訪問した後、一八九九年九月一

三日に長崎港に到着。そこで五日間を過ごした。一九二三年三月一日、パリで世界的に著名な小説家になっていたファレールは、講演シリーズ『私の極東旅行』の最終回として「近代日本」を語り、日本に対する最初の印象を「約束の地」(la terre promise)と表現した。キリスト教世界で「約束の地」と言えば最高の評価であり、日本を天国に近い国だと明言したことになる。翌年、その講演内容は旅行記『私の旅行』第一巻として出版された。

バルゴーン海軍士官の初来日の印象はすべて明るいものだった。そのときの印象を思い起こして、作家・ファレールは具体的に次のような描写した。「日本では、本当の冬、本当の春、本当の夏、本当の秋がある。フランスとまったく同じだ」。「日本は、美しい花の国、美味しい果物の国、素晴らしい民芸の国、また清潔な国だ」。「日本語には、悪口や侮辱の言葉がない。逆に、特別な敬語を持っている」。「日本を描く最も相応しい言葉は『oui』という形容詞だ」。「フランス語の『oui』には「かわいい」という意味がある。⁴⁾

最初の印象が最も強く残る、とよく言われる。バルゴーンヌの日本に対する印象も同様であった。インドシナ勤務の時から彼は、旅行記、のちに小説を執筆し始め、ペン・ネームを用いるようになった。当時のフランスで「植民地小説」のジャンルは最盛期にあつたので、ファレールはすぐに人気者となつて、一九〇五年に小説『文明人』(一九〇三年)によってゴンクール賞を受賞した。

ファレールの小説及びノン・フィクション作品の主要なテーマは植民地での生活と海軍の物語であった。フランス第三共和制の植民地政策を「文明化」として賛美していた作家・評論家は、おおむねアジア民族の文化・文明を愛好し、中でもトルコ人と日本人を高く評価した。ファレールも親トルコ(オスマン・トルコ、後にムスタファ・ケマル・アタテュルクの政権)派、親日派の人物として知られている。

一九〇四年、日露戦争の時に、ファレールはオスマン・トルコの首都コンスタンティノポリスに勤務して、帝政ロ

シア大使館の人々と交流を持った。戦争勃発直後、フランス人は、ロシア人の知人に「日本は必ず勝つ」と予言し、「氣を付けろ！」と警告した。誰も信じようとしなかったが、その予言は間違っていないかった。「ツァーのロシア軍はよく戦ったが、ミカド〔当時西洋では天皇陛下をこのように称した〕の日本軍はもつとよく戦ったので勝利した」とファレールは結論した。「この戦争は、ロシアにとっては植民地戦争であったが、日本にとっては国防の戦争、国民の戦争、愛国の戦争だった」とこの作家は解説した。⁵⁾

ファレールは、日露戦争を自分の目で見ることがなかったが、それを題材にして小説『戦闘』を執筆した。⁶⁾ その作品はファレールの最も有名な日本関係の著作になった。原稿は地中海勤務中（一九〇七年一〇月二〇日〜一九〇八年九月一二日）に書かれたものである。一九〇八年一月から保守的新聞『エコー・ド・パリ』で連載され、単行本が一九〇九年二月に出版された。一九一一年には改訂版が出ている。

文学作品としての『戦闘』は、戦争とロマンスの物語であるが、深く吟味すれば、文明の闘争についての作品であることがわかる。『戦闘』は、日本海海戦をクライマックスとして、一九〇五年四月二一日から同年五月二九日までを描いている。一九一一年改訂版の著者の前書きによると、「イギリスのある海軍大将は本書を『海戦の素晴らしい記録』と評価した」という。海軍と文学のプロフェッショナルであったファレールは、あまり的外すことはなかったようだ。

翻訳も多数刊行された。英語（一九二二年）、ドイツ語（一九一六年）、ロシア語（一九一七年）と、日本語の翻訳は二種ある。映画は少なくとも三部制作された。日本語翻訳のうち、一つ目は、高橋邦太郎（一八九八〜一九八四年）が訳して、一九三〇年（フランス初版本から一九年後）改造社のシリーズ『世界大衆文学全集』に収録された単行本『ラ・バタイユ』である。訳者の高橋は、フランス語から多数の文学作品を翻訳して日本でフランスとその文学を紹

介・研究した文学者である。二つ目は、作家・詩人の野口錡一（一九三一年生）が訳して、一九九一年に福岡市の葦書房から出された『戦闘』である。⁷⁾ 両書とも、古書マーケットでは稀覯本だと言える。

文明論としての『戦闘』は、レーニンの表現を借りれば、「後進的ヨーロッパ対進歩的アジア」の闘争を描いたものである。日本人の主役である海軍士官ヨリサカ侯爵は、『ロシア』はむしろ『アジア』である。逆に、我ら日本人はすぐヨーロッパ人になる」と述べている。ファレルが描いた日本人は、「スーパーマン」ではなかったが、著者は、日本の勝利を、欧州から広い意味での技術を十分に学んで、それを武士道と結びつけた和魂洋才の成功であるとし、技術・戦術に、近代的戦争に欠けている武士道がプラスされたことが、日本の勝利の原因であると、論じた。著者のシンパシーは明らかに日本側にあるが、ロシア側を軽蔑する様子も全く見られない。『戦闘』のロシア語版は、一九一〇〜一九二〇年代にかなりの人気を博している。

ファレルは前書きで、この小説には「フィクション」と「ファンタジー」が「ほとんどない」が、日本人の主役三人（全員大名家の出身者）——海軍士官「ヨリサカ・サダオ侯爵」、その妻「ヨリサカ・ミツコ侯爵夫人」ともう一人の海軍士官「ヒラタ・タカモリ子爵」——は、「写真的肖像画であるより、むしろ日本の貴族の総合的な反映」である、と述べている。これはどのような意味なのだろうか？

フランス人読者に一般受けのする小説には、ロマンスが必要で、特に不倫の物語が望ましいとよく言われる。年若く魅力的な貴婦人ミツコ・ヨリサカ侯爵夫人は、快活な若い英国海軍士官ハーバード・フェアガンに思いを寄せ浮気をした。フェアガンの描写は似顔絵ではないが、フランス海軍の軍人が一般的にイギリス海軍の軍人に対して好意を感じなかったことは、ファレルの文学作品や回想録からも知られる。

物語では、厳格な海軍士官ヨリサカ侯爵は日本海海戦で戦死し、観戦武官フェアガンも戦死した。海戦の後、ヨリ

サカ侯爵との複雑な関係から、フェアガンを「イギリスのスパイ」であり「我ら〔日本人〕の偽りの友人」と評したヒラタ子爵は切腹した。また不倫したミツコ侯爵夫人は、京都のある尼寺の尼になったとされる。フェアレールは前書きで、「日本人侯爵夫人が英国海軍士官と浮気した事実は一度もなく、日本海海戦直後日本人海軍士官が切腹した事実もなかった」と断っている。その真偽について筆者は確認していないが、軍事道徳、家族道徳に厳しい日本人読者は、「外人との不倫の物語」に対してシンパシーも理解も持てなかったと思われる。西洋では明らかに親日小説と見られた『戦闘』だが、日本では中傷と見られたのではないかと推論せざるを得ない。

『戦闘』という作品は現在、他のフェアレール作品の大部分と同様にフランスでもほとんど忘れ去られていると言える。しかし、フランスの香水・化粧品の世界的品牌であるゲレン社は一九一九年からそのヒロインの名前を冠して香水「Mitsouko」を作り始めた。今もその香水はゲレン社を代表する商品である。日本語のウィキペディアには、「クロード・フェアレール」より先に「Mitsouko」(香水)が収録された。

フランスだけでなく諸外国で『戦闘』の反響は大きかった。フランス人政治家・政治評論家アナトール・ド・モンジエ (Anatole de Monzie: 1876-1947) は、「二十世紀に我等が受けたアジア関係情報の源は主に小説からであった。資料が足りない場合には、想像で補った。フェアレールの『戦闘』は我等に極東の教訓をうまく説明してくれた」と述べている。⁽⁸⁾フェアレールはフランスで一般的に日本通として知られていたのである。

フェアレールが評した日本の大陸政策

フェアレールは、ほとんど毎年新作を発表し、その多数の翻訳によって、世界的に有名になった。彼は一九一九年に退

役してからも、文学活動を熱心に続けた。一九三五年には、フランス人作家としての最高の荣誉であるアカデミー・フランセーズの第二八号会員座席に選ばれた。退役後のファレールは、青年時代から国際政治に対する関心をもっていたので、小説に限らず、政治評論も執筆していた。政治の素人とは言えないこの作家は、フランスの帝国主義政策、植民地政策を支持して、アタテュルクのような海外の強権的な政権に対するシンパシーを見せた。フランス内政については、共和政を基本的に批判せず、保守主義者、反共產主義者、ナシヨナリストであるシャルル・モーラス思想の影響を受けた。「私はモーラスから正しく考えることを学んだ」とファレールは述べている。⁹⁾

『私の旅行』の第一巻である『極東旅行』(一九二四年)で日本を語るファレールは、フランス人読者に「武士道、日本人の道德規範」を紹介して、こう述べている。武士道は「我ら〔西洋〕の騎士の道德規範に似ているが、もつと永遠的、もつと絶対的、いうまでもなくもつと文明的」であり、「十三世紀から変わらず現在も日本を指導している」¹⁰⁾。日米紛争・戦争の可能性を検討したファレールは、フランスの立場を次のように論じた。「太平洋における我らの利益は多くないので、その地域に紛争が起こった場合、我らは中立を守ると確信している。……現在、私は日本の素晴らしい勝利を予言できる。決定的瞬間〔日米決戦の意味〕に我らのシンパシーは日本側を支持する可能性がある」¹¹⁾。その発言は、『極東旅行』の最後の下りであり、これ以降のファレールの日本観、日本政策を評価するポイントになる。

一九三〇年代後半、ファレールはフランス親日派の「声」になったと言える。日中戦争勃発以前に出版されたエッセイ『東洋の精神的勢力 インド——中国——日本——トルコ』(一九三七年)でファレールは、フランスを中心する西洋文明と日本文明の基本的近似を論じて、「偉大な国である日本に偉大な人物がいた。信長はリシユリュ、秀吉はナポレオン、家康はルイ一四世だった」と述べた。日本の人口過剰問題の重要性を認めたファレールは、「カリフォルニア、オレゴン、ワシントン〔州〕また無人のオーストラリア」が日本の「植民開発のために必要な領土」だと考え

た。¹³ 日中関係の現状を検討した際、ファレールは「日本が大陸に出兵するとすれば、それは、ロシアの軍事的、政治的侵略を防止する目的だけである」と論じた。¹⁴

ファレールの立場は当時の日本側の宣伝に役立った。一九三七年末、日本の外務省は彼を「絶対的独立性を持った有名な作家」として日本へ招待した。ファレールの二回目の日本訪問は、一九三八年一月三〇日に神戸から始まり、二週間に及んだ。「貴族の出身、貴族院議員の息子であり、将来必ず大使になる」とファレールが言った青年外交官松井明（一九〇八〜一九九四年）はこのゲストに同行していた。¹⁵ その父・松井慶四郎は、駐フランス大使、駐英大使、外相、貴族院勅選議員を務めた後、一九三八年に枢密顧問官に任命された。パリで生まれた松井明は、ファレールの予言したとおり、戦後、国連大使、駐フランス大使を務めた。

ファレールの日本訪問スケジュールには、内閣総理大臣近衛文麿、外務大臣広田弘毅、海軍大臣米内光政等との会見、東京、日光、鎌倉、京都、奈良、下関の見学、そして朝鮮と満州国への旅行が組まれていた。この作家は、海路で帰国するとただちに『アジアの大悲劇』（一九三八年）を執筆した。その第一部は日本旅行記で、ほとんど全ての印象は「最高」だったと言える。「日本は変わったか」と聞かれたファレールは、「変わっていない。……外に新しく内々に永遠の国だ」と答えた。¹⁶ 第二部『一九三八年の中国と日本』は、印象と共に感想の記録でもあった。モロッコとインドシナでフランス植民地政策の結果を高く評価したファレールは、それと朝鮮・満州での日本植民地政策の結果を比較して日本の成功だけを強調した。¹⁷ その日本を擁護する著作は一九四〇年に森本武也の日本語訳で出版された。

「若く強い」日本と「古く弱い」中国との比較は、著者の感想の中心になった。大陸において満州国以外にも日本が「拡大」することを何の疑いもなく支持していたファレールは、中国の地域政権を「暴力団」と呼んで、ソ連の「侵略」を非難した。「今日本が中国で戦っている闘争は、中国と中国人に反対する闘争ではない。共産主義に反対する闘

争だ。秩序と文明のための闘争、モスクワの隷属に反対する闘争だ。……秩序、文化と社会平和の国日本は、自分に迫るクレムリン風の野蛮行為の普及を我慢できない」とファレールは断言した。⁽¹⁸⁾

フランス右翼の知識人と政治家は、新しい戦争の可能性を論じる時、ナチ・ドイツばかりでなく、ソ連についても、危険と見なしていた。フランス共産党の元首脳、コミンテルンの元活動家ジャック・ドリオ (Jacques Doriot; 1898-1956) は、一九三四年にモスクワと喧嘩・断絶した後、ファシスト風のフランス人民党を設立して、ソ連との協力関係を激しく批判した。「第三インターナショナルにはインターナショナルリズムがなくなった。世界のチェスボードでゲームをするソ連しかない。……ソビエト、それは戦争だよ。……その(一九三五年の仏ソ条約締結)直後、スターリンは東洋に向かい、日本に反対した。……数週間後アジアにおけるソ連政策が変わった。もつと戦略的になって、その政策は現実的に動きはじめた。……(アジアで)日本の前進を止めるためにスターリンは参戦もしかねない」と、ドリオは一九三六年夏、支那事変勃発一年前に、こう発言していた。⁽¹⁹⁾

一九三九年七月にファレールは、新しい政治評論『アジアにおけるヨーロッパ』を書き上げ、同年一〇月に単行本で出した。フランス語翻訳者岡倉正雄の日本語訳は一九四一年に出版された。そのエッセイにファレールは「極西」(Extreme Occident)と称して、日本の文明を論じた。

「日本人は絶対的に東洋の民族ではない。二千年くらいアジアの辺境に住んでいた日本人は物理的にアジア人に似ているが、それは外観の類似だけだ。歴史と国民性において日本人は、アジアではなく、ヨーロッパ、アメリカ、またオセアニアと連なっている。道徳的に日本人はフランス人に近い。ロシア人、ハンガリー人、またドイツ人よりフランス人に近い。……日本の歴史は極西の歴史だ。……日本近代史はフランス・イギリス近代史のコピーのように見える。……日本はヨーロッパを模倣する必要がなかった。日本人は、本能でも、たぶん起源においてもヨーロッパ人

だ」⁽²⁰⁾。フランス人と日本人の特に近い本質は「国民意識と愛国心」であるとも言っている⁽²¹⁾。

一九三六年一月の西安事件に基づいた小説『十一時』(一九四〇年)でもファレールは「極西論」の宣伝を続けた。「ヨーロッパも日本も、多面的アジアである中国が全然分らない。日本人は極東の民族ではなく、極西の民族だ」⁽²²⁾。著者が想像した現在の日本は、「フランスだが、もつと規律正しい〔国〕」。イギリスだが、もつと平等の〔国〕。イタリアだが、全体主義とドイツ化を拒否した〔国〕⁽²³⁾である。

ファレールによると、日本人とフランス人は似ているが、中国人はこの両民族と基本的に違う。「ヨーロッパ、アメリカ、また日本の政府と外交官が中国人を自身と全く同じような人物だと考えるのは、主要な間違いであった。中国人は他の民族と基本的に違うので、それは大変な間違いであった。中国人がほかの民族より良いか悪いかではない。全く違うということだ」⁽²⁴⁾。それではファレールは「反中」であったのか。小説『十一時』に描かれた西洋風独裁者「スン・テヨ・ウエイ」(蒋介石)は道徳的な兵士だが、元帥「クン・ウエン・チュン」(張学良)はモスクワのパベツトで、極悪人である。この小説は、ファレールの最後の日本観を反映した作品であった。

「日本之所謂御平和」を批判したフランス人と絶賛したフランス人

支那事変の勃発は、フランスでも「ビッグ・ニュース」になって、日本の大陸政策に対する議論が続けられた。

蒋介石政権の法律顧問ジャン・エスカッター(Jean Escarra: 1885-1955)法学博士は、中国政策を弁護して、日本政策をより激しく非難した。本論文の第二部で筆者は、エスカッターのパンフレット『中国に対する日本政策と現在紛争の法的側面についての意見書』(一九三七年末)を論じている⁽²⁵⁾。支那事変勃発以前の出来事を概説して、エスカッ

ラーは、将来に向けて次のような予言、警告を発した。

「フランスとイギリスは、アジアで反日戦争を戦う能力が足りない。ヨーロッパで両国の能力が少しでも弱くなったら、リスクが最大になる（ナチ・ドイツ向けのヒント）。特にフランスは、インドシナのため現在の紛争に直接的な関係があり、日本の勝利は破綻を意味する。……直截な反日参戦ばかりでなく、列強（イギリス、フランス、アメリカ）は、国際連盟で日本に対する制裁を断乎として加える手段がある。……日本の軍事力、経済力を絶対的に弱めるのは、紛争の最小の結果として基本的に重要である」⁽²⁶⁾。

エスカッターは国際法とその違反を語るに止まらず、以上のように帝国主義の言語をはっきり利用した。しかし、一九三七年一二月末以後、日本軍の勝利の可能性が高くなった。一九三八年七月、支那事変勃発一年後にエスカッターが出した新しい論文⁽²⁷⁾のカバーには、漢字で『日本之所謂御平和』（フランス語「L'honorable paix japonaise」）とタイトルが書かれていた。明らかに皮肉の意味である。

中国弁護・日本非難の総合的基礎概論として執筆された論文は一九三八年四月に完成した。その仕組みは法学者・弁護士であるエスカッターの議論を反映するものだとと言える。『序文』（一一―一八頁）で著者は、主に「事実をまげて、数字（統計）を軽々しく扱って、ニュースをねつ造する」ばかりでなく「嘘を常習的に行っている」「日本のプロパガンダ」（一一―一二頁）、日本政府、外務省、陸軍・海軍などのステートメントを具体的に批判・否定している。そのコメントの中に注意すべき点がいくつかある。

一つ目は、フェアレールに対する明白な批判である。「ロティー」⁽²⁸⁾に続く海軍士官の文学作品は、日本陸海軍兵士の『義侠的な』心のテーマを悪用している。中立的（公平な）傍観者は、中国で彼ら（日本の兵士）が行った多くの野蛮な行為を立証している（一四頁）。二つ目は、フランスにおける親日的立場の批判である。「複数の新聞で嘘や見損ない

の簡単な反論を公刊するのは不可能だが、日本の手先は、小切手を必要な人の手に渡し、それ「嘘・見損ない」をうまく公刊する」(一七頁)。三つ目は、フランス国内の左翼・右翼の日本観・中国観を論じた点である。「日本は秩序、平和、幸福を代表すると言われているので、右翼の人々はその側を支持する」(一七頁)と共に「反ファシストは中国側を支持する」(一四一頁)。エスカッターは右翼新聞『L'action française』の反中宣伝を直接に批判した。「本流的ナシヨナリズムの機関紙」と呼ばれるこの新聞は、「中国ナシヨナリズムの根絶が必要だ」と発言した(一一〇頁)。

第一章『アジアの二つの民族』(一九〇五頁)にエスカッターは、中国人と日本人を比較した際、「中国は民族より文明」で、「中国の家族は人類が結成した機関の最も優秀なものだ」と述べた(二〇〇～二二頁)。逆に、「日本人は教育を受けても未開の部分を持している」(三七頁)。中国での日本陸軍の「野蛮行為」、日本での殺人・クーデターの試みに注意して、「日本は自由な討論の国ではなく」、「国会は国の運命に役割を果たさず」、「陸海軍が内閣を設置する」(三九〇～四〇頁)等と述べたエスカッターは、ある程度正しかったと結論できる。しかし、当時の中国はどのような国だったのか、とも反論できる。著者によると、「アジアで秩序と文明の擁護者、完全に近代化された日本と後れて野蛮な中国の俗悪な対立は、日本のプロパガンダ、日本が買収した新聞の虚構だ。その中にはフランスの影響力をもつ新聞もある」(二九〇～三〇頁)。

第二章『侵略の政策』(五三〇～九二頁)で著者は、日本の大陸政策史の総合的概論をさらに進めて、批判の鋒先を「非民俗化と同化」の植民地政策に向けた。朝鮮半島は「弾圧の王国」で、「朝鮮人は奴隷のような状態にある」などとエスカッターは述べた(六二二頁)。ここでも親日・反日の観察者の印象・見解は逆であったが、海外から見た日本の朝鮮政策は特別な研究テーマであった。「中華民族とその反抗の意志を弱める手段」として日本の阿片生産・販売政策を批判した後、エスカッターは、イギリスの阿片政策も忘れなかった(七六〇～八一、一九九頁)。東亜における仏英競

争の足跡ではないかと。

第三章『原因と口実』(九三～一二三頁)で著者は、日本国内の人口過剰問題を詳細に検討している。問題の事実を認めたエスカッターは、中国と協力して平和的な解決が可能だと論じて、「日本の拡大は侵略戦争のみ」なので、解決の助けにならない(九六～九八頁)。逆に、中国での共産主義の思想と運動の偉大な影響力とその危険性のテーゼは、エスカッターによって日本のプロパガンダ的嘘として拒否された。ソ連・コミンテルンの働きかけは二〇年に及ぶが、その影響力は社会的にも、地域的にも限られたものである。その理由は蒋介石と国民党の反共闘争だ、と著者は強調した(一二一～一二三頁)。

第四章『責任』(一二五～一四六頁)で著者は、日本の「侵略政策」と「国際条約違反」だけでなく、西洋と中国の間違いも認めた。「日中戦争勃発直前、中国が弱体化したについては、ソビエト〔ソ連〕と中国共産党の責任が重い。……中国全体がソビエト・イデオロギーの影響を受けたと言われるのは、共産党の活動が海外でそのイメージを支持しているからである。……〔そのため〕中国の統一は遅れて困難になった。中央政府〔国民党政権〕の権威は危険に瀕している。ソ連は、外蒙古をとらえて、他の地域に進出した際、日本と同様に中国の領土保全を尊重しない」とエスカッターは結論した(一四四～一四五頁)。

第五章『法律と暴力』(一四七～一九六頁)で国際法から見る日中紛争の本質と特徴を詳細に分析したエスカッターは、中国が地域的・二国間協定に違反していたとしても、日本は国際法の基本的条約に違反している、と強調した。筆者はこのエスカッターの国際法関係論考を以前、検討している⁽²⁹⁾ので、ここでは繰り返さない。

第六章『知られてこないこと』(一九七～二二七頁)で著者は、紛争の可能性について論じた。一つ目の結論は、日本か中国の「決定的勝利は不可能だ。……日本と中国が緒戦で戦っても、太平洋に権益をもつ国家は中立を履行して

いる。しかし、平和条約（の準備・交渉の時）について、列強はもちろん声を出す」（二〇〇頁）。二つ目は、親日プロバガンダと異なり、日本の勝利はフランスの利益に対してより危険だが、中国が勝利すれば、その危険性はない（二〇一〜二〇二頁）。三つ目は、「中国での日本の勝利は外国（西洋の列強）に経済的利益をもたらさない。……逆に、中国に於けるその立場はさらに危なくなる」（二〇六頁）。中国ウォッチャーの見解に基づいてエスカッターは、日本の侵略に対して「弱い」フランス政府の方針を批判して、日本の軍事力は誇張されてきたので、反日経済的制裁は日本侵略を阻止できる可能性が高い、と述べた（二一四〜二一六頁）。それと共に『結語』（二二九〜二三一頁）で著者は、「国際相互援助」と「集団安全保証体制」を「素晴らしい幻」だと皮肉を込めて評価した（二三二頁）。

読物ではなく、知識人一般向けの論文として書かれたエスカッターの本には註と参考文献がある。しかし、引用された資料と著作は殆ど全て親中・反日である³⁰。一つの代表的な例は、中国通として知られたロゼー・レヴィー (Roger Lévy: 1887-1978) の作品『極東と太平洋』（一九三五年）と『日中関係』（一九三八年）である。当時太平洋問題研究会 (Comité d'études des problèmes de Pacifique) 書記長であったレヴィーは、満州事変の時に『満州は、だれのものか?』（一九三二年）を発表し中国の立場を弁護して、戦後にフランスで毛沢東の思想と行動を紹介している³¹。また『田中上奏文』の偽造を認めながらエスカッターは「その内容を簡単に否定することはできない」と述べた（九〇〜九一頁）。

原稿を書き終わった後エスカッターは、改めて東亜を訪問して、一九三八年五月二日に国民党政権の臨時首都になった武漢市で『前書き』を執筆した（七〜一〇頁）。現地調査した結果、著者は次のような感想と結論を書いた。一つ目は、「日中戦争勃発は、中国にとって二年早く、日本にとって二年遅かった」（八頁）。二つ目は、「戦争は、中国人兵士のゆるみ、日本軍の不敗性、日本人兵士の軍律と義侠的な精神についての神話を粉砕した。中国陸軍に勤務し

ているドイツ人将校が言った通り、中国人は素晴らしい兵士であり、日本人〔兵士〕と同じく勇敢だが、より賢く規律正しい(八〇九頁)。三つ目は、「明日講和が決定されたとしても、それは一時的休戦だけになる」(九頁)。四つ目は、「極東紛争とヨーロッパ情勢は不可分だ」(九頁)。というのは、ドイツの影響力は中国でも日本でも強かったが、「ドイツが中国への支援を停止すれば、それがフランスのために適当なチャンスになる」。そうしなかつたら「戦後アジアで白人に残された遺産を、我が〔フランス人〕は全部失うリスクが高い」と述べて著者は『前書き』を完成した(一〇頁)。

エスカッター著『日本之所謂御平和』は当時のフランスで親中・反日的立場からなされた解説・弁護として最も詳細かつ総合的な論文であるので、その詳細な検討は、本研究のために必要であった。

日中戦争が話題になっていたので、東洋学の専門家だけでなく作家、評論家もこのテーマを論じた。その一人はフランス社会党に近かった政治・社会評論家、思想家フェリシエン・シャライ(Felicien Challaye: 1875-1967)である。日仏関係史の中でその著作と行動は研究されていないので、紹介が必要であろう。

シャライは、一九〇一年に日本と中国を初めて訪問し、旅行記『日本と極東にて』(一九〇五年)、後に『絵の日本』(一九一五年)を出した。第一次世界大戦中、日本(一九一七年六月末〜九月末)、朝鮮(二〇月)、中国(二〇月末〜二二月末)、改めて日本(一九一八年二二月末〜一九一九年四月末)で政治事情を研究して、朝鮮、中国、インドシナを通じて帰国した。⁽³²⁾ 研究論文『中国の政治、日本の政治』(一九二一年)と『日本労働運動』(一九二一年)はその成果であった。またシャライはエッセイ『日本の心』(一九二七年)と『日本の昔話』(一九三一年)を出している。⁽³³⁾

以上の著書を通読して、著者は親日であったと結論できる。ファレルと同様に、シャライはジャポニズム時代に生まれ育ってきたので「美しい日本」への関心が強かった。左翼平和主義者として彼は「大正デモクラシー」と中国

民主主義運動を高く評価した。支那事変勃発の時、シャライは長く極東の現実から離れていたが、『中国、日本と列強』(『結語』日付一九三八年一月一日)を出した。

シャライの立場は親中と言えるが、反日と言えばニュアンスが違う。中国政府顧問のエスカッターは、中華民国を近代的な民主主義の国家として描いたが、独立のヒューマニスト、人権擁護者シャライは、第一章『中国』(九〜三〇頁)で、戦争と暴力を嫌う平和的民族が長期的に列強に抑圧されてきた不平等な境遇として中国人を悲しく描いて、国民党政権の近代化への努力にシンパシーを見せた。第二章『日本』(三一〜五〇頁)でシャライは、日本近代化の成功を賞賛した後こう結論した。「日本が、弱く危険に瀕した国でありながら、民族の力を合わせて、自分の自由を守るためにも海外で影響を及ぼすためにも強くなったのは、全世界への教訓になった。ヨーロッパとアメリカの列強が異なる人類・非キリスト教の国を対等と見なしたのは初めてである。……残念ながら、その成功は日本首脳的心を墮落させた³⁴⁾。シャライは日本の人口過剰問題の存在を認めしたが、その事実は「他のもつと弱い国を占領する権利を与えるものではない」と述べた³⁵⁾。

第三章『中日関係』(五一〜六六頁)でその近代史を概論した中で、シャライは、日本の大陸政策を批判し、日本人政治家は中国を「アジアのバルカン〔半島〕」、危険な無秩序の地域と見なしたと述べた³⁶⁾。第四章『中日関係と列強』(六七〜七九頁)で著者は、各国との関係を簡単に説明して、「中国の青年は自由主義、革命、非宗教化のフランスを特に尊重する」と強調した³⁷⁾。第五章『現在の中日紛争』(八一〜八八頁)で著者は国際連盟の立場を支持した。

シャライの見解・予言として『結語』(八九〜九五頁)は注意を引く。一つ目は、「日本が罪深い侵略の責任者であることは、疑問の余地がない」。二つ目は、「軍事的に勝利しても日本が支障なく中国全土を統制できる可能性は低い」。しかし、日本国内で「ミカドのボルシェビズム」という国家社会主義指導下の社会革命に関する著者の予言は、少な

くとも無邪気だと思われる⁽³⁸⁾。

親日的立場を擁護する知識人のもう一人は、シャリュックスであった。ペン・ネーム「シャリュックス」を名乗ったベルギー人ロジェー・ド・シャテロー侯爵 (Chalux, 本名 Roger de Chateaux, 1878-1956) は、様々な活動の経験を持つている。主にジャーナリストと映画監督として知られたシャリュックスは、一九一〇～一九二〇年代、中国長期滞在中に多数の地域を訪問したが、「ヨーロッパ人は中国に長く住んでも、中国人の目で見ることができない」と認めた⁽³⁹⁾。日中戦争勃発以降、彼は改めて日本と中国を訪問して、旅行記・評論『中日紛争を巡って』(一九三八年)を出した。ベルギー人であってもシャリュックスは一九三八年に新聞『L'action française』と協力していたので、フランスに読者が多く、フランス知識人と見られていた。

その感想を語った著者は、東亜政治事情についてコメントして、エスカッター等の立場に反論した。「ある欧米人は『中国の平等・デモクラシー政権』を『日本の絶対権力』と対立させる。それがいけない。日本の普通選挙権と法律の平等をヨーロッパ的デモクラシーではない、と信じる人物がいる。しかし、中華民国は絶対、共和国ではない。現在の政権は独裁政権だ。中国人には主権がなく、投票もしない。……日本では『平民が嫌な戦争と飢餓のため不満を抱き革命を始める』と言われるが、私は中国に行く前日本を訪問して、帰り道にも訪日し、ミカドの帝国は秩序が完璧だ」と感じた。「……中国は統一していると信じる人物もいる。……しかし、北京の中国人と広州の中国人の差異はノルウェー人とポルトガル人の差異と同様である⁽⁴⁰⁾」。

「基本的に世界は日本が嫌い。それはなぜか？」と聞かれてシャリュックスは躊躇なくこう答えた。「日本が世界のマーケットで危険な敵手になったので。……世界は新しい列強が生まれたと理解した。その時から反日の感情も生まれた」。そのため日本人は「どこでも敵を見つけて、脅迫妄想を持つらしい」とコメントした後⁽⁴¹⁾、著者は「警備の国

家」日本における自分の経験を紹介した。親日的な著作ではこのような物語は例外だと結論できる。

シャリユックスの文書は、一部は資料の引用（蒋介石と毛沢東の宣言を含めて）で、一部は読みやすい旅行記である。その内容を詳細に繰り返す必要はないが、著者の主要な感想だけを検討してみよう。一つ目は、北中国では「住民が占領日本軍と仲が良く、ある地域では日本人が解放者とみなされた」⁽⁴³⁾。その件についての説明は特に長い。二つ目は、「中国人は基本的に外国人が嫌いで憎む。……青年中国は我々から得た政治的理想を尊重するが、そのナショナリズムは西洋人の憎悪と不可分だ。……ある列強が譲歩をすれば、中国はそれを軟弱と考えてもつと外人嫌いになる」⁽⁴³⁾。三つ目は、中国共産党は実に強いし、その行動を統制するソ連はどんどん「東亜の中心に、支那本部に向けて侵入している」というものである。一言で言えば、日中戦争は「ソビエトと中国共産党が望んだ戦争」である⁽⁴⁴⁾。またシャリユックスが見て描いた日本軍と中国軍の比較は、明らかに日本軍の為になった。「中国人より平和を好む民族が世界になれば、なぜ中国にはどこでも兵士がそんなに多いのか」とシャリユックスは皮肉を込めて聞いた。結論として、「一般的な意見と違って、日本が中国を攻略できる望みはない」と著者は述べた⁽⁴⁵⁾。

シャリユックスの本は「日本のプロパガンダ作品」なのか。筆者は彼の旅行と仕事の背景を確認できなかったが、右翼である著者は本心から日本の大陸政策を支持したと考えられる。少なくともその著作は当時のフランス世論の一部を明確に代表していた。

フランスの知識人、政治家、政治評論家は、満州事変以降の日本の大陸・植民地政策を検討、評価する際、親日派と親中派に分かれた。親日派は、必ずしも反中ではなく、フランスの国益から見れば、東亜における共産主義の拡大に比較すれば日本の拡大は危険でない、と評した。立場の違いに関わらず、親日派も親中派も、日本を列強の一つと

見なして、中国をフランス、イギリス、日本と比較できない国際的地位の国、国際政治の主体ではなく、客体と見なした点では共通する。支那事変勃発以降、フランスでの親日派と親中派の対立は激化した。筆者はその問題を研究しつづけるつもりである。

《註》

本稿の引用は全て筆者がフランス語から翻訳したものである。

- (1) ファレール関係文学評論は、フランス語で多数。評伝は、Alain Quella-Villegier, *Le Cas Farrere: du Concourt a la Disgrace* (Paris: Presses de la Renaissance, 1989)。「ファレールと日本」の専門的研究は、入門的な論文一件しかなく、Patrick Beillevaire, *Après La Bataille: l'egarement japonophile de Claude Farrere Les carnets de l'exotisme. Faits et imaginaires de la guerre russo-japonaise (1904-1905)* (Paris: Kailash, 2005).
- (2) Claude Farrere, *Mes voyages. I. La promenade d'Extreme-Orient* (Paris: Flammarion, 1924), p. 277.
- (3) 同上, p. 278.
- (4) 同上, pp. 249-250, 255, 257.
- (5) 同上, pp. 275-279.
- (6) Claude Farrere, *La Bataille* (Paris: Paul Ollendorf, 1911)。本稿で利用した再版、日露戦争関係文学作品集、1905, *Autour de Tsushima* (Paris: Omnibus, 2005)。
- (7) クロード・ファレール著、高橋邦太郎訳『ラ・バタイユ』(世界大衆文学全集第五七巻、改造社、一九三〇年)・クロード・ファレール著、野口錡一訳『戦闘』(葦書房、一九九一年)。
- (8) Anatole de Monzie, *Petition pour l'histoire* (Paris: Flammarion, 1942), pp. 84-85.
- (9) Eugen Weber, *L'Action française* (Paris: Stock, 1964) pp. 568.
- (10) Claude Farrere, *Mes voyages. I. La promenade d'Extreme-Orient*, pp. 238-239.

- (11) 同上¹⁾ p. 284.
- (12) Claude Farrère, *Forces spirituelles de l'Orient: Inde - Chine - Japon - Turquie* (Paris: Flammarion, 1937), p. 159.
- (13) 同上¹⁾ p. 169, 171.
- (14) 同上¹⁾ p. 172.
- (15) Claude Farrère, *Souvenirs* (Paris: Arthème Fayard, 1953), p. 269.
- (16) Claude Farrère, *Le grand drame de l'Asie* (Paris: Flammarion, 1938), p. 42, 48. 日本語訳、クロード・ファレル著、森本武也訳『アジアの悲劇』(日光書院、一九四〇年)。
- (17) 同上¹⁾ p. 105.
- (18) 同上¹⁾ pp. 113-114.
- (19) Jacques Doriot, *La France ne sera pas un pays desclaves* (Paris: Les œuvres françaises, 1936), pp. 105-106, 57.
- (20) Claude Farrère, *L'Europe en Asie* (Paris: Flammarion, 1939), p. 8, 56. 日本語訳、クローデ・ファレル著、岡倉正雄訳『アジアにおけるヨーロッパ』(新世代叢書、育生社、一九四一年)。
- (21) 同上¹⁾ p. 36.
- (22) Claude Farrère, *La onzième heure* (Paris: Flammarion, 1940), p. 127.
- (23) 同上¹⁾ p. 274.
- (24) Claude Farrère, *L'Europe en Asie*, p. 19.
- (25) 詳しくは、ワシリー・モロジャコフ「フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策(二)——満州事変から支那事変にわたる」(『拓殖大学国際日本文化研究』第二号二〇一八年)。
- (26) Jean Escarra, *Réflexions sur la politique du Japon a l'égard de la Chine et sur quelques aspects juridiques du conflit actuel* (<Perpignan: L'Indépendant, 1937>), pp. 25-26.
- (27) Jean Escarra, *L'honorable paix japonaise* (Paris: Bernard Grasset, 1938), 引用し頁番号は本文で括弧内に記した。
- (28) ヴェール・ロネー(Pierre Loti: 本名 Louis Marie-Julien Viaud, 1850 - 1923)¹⁾ フランス海軍士官、旅行・ロマンスの小説で

- 世界的に有名な作家、植民地小説のジャンルにおけるフアラールの先駆者。日本を訪問した後、旅行記『秋の日本』(一八八九年)と小説『お菊さん』(一八八七年)を執筆した。
- (29) Jean Escarra. *Le Conflit Sino-Japonais et la Société des Nations* (Paris: Publications de la conciliation internationale, 1933); シーリー・モロニャロフ「フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策」(二)(同上)。
- (30) 例として T. O'Connor. *The Menace of Japan* (London: Hurst & Blackett, 1933; 再出版 London: Hutchinson, 1938); Freda Utley. *Japan's Feet of Clay* (London: Faber & Faber, 1936; トビンス語翻訳『Le Japon aux pieds d'argile』(Paris: Payot, 1937)°。ホ・クロイ著作のロマニア語翻訳(一九三四年)が反日キャンペーンに利用された。
- (31) Roger Lévy: 1) *A qui la Mandchourie?* (Paris: Pedone, 1932); 2) *Extrême-Orient et Pacifique* (Paris: Armand Colin, 1935); 3) *Relations de la Chine et du Japon* (Paris: Paul Hartmann, 1938); 4) *Regards sur l'Asie* (Paris: Armand Colin, 1952; 5) *La révolte de l'Asie* (Paris: PUF, 1965); 6) *Mao Tso-Tong* (Paris: Seghers, 1967). 筆者はレヴィの日本大陸政策観をめぐって深く研究する予定がある。
- (32) Felicien Challaye. *La Chine, le Japon et les puissances* (Paris: Rieder, 1938). p. 7. シャンハイの評伝が詳しく研究がなつた。
- (33) Felicien Challaye: 1) *Au Japon et en Extrême-Orient* (Paris: Armand Colin, 1905); 2) *Le Japon illustré* (Paris: Larousse, 1915); 3) *La Chine et le Japon politiques* (Paris: Felix Alcan, 1921); 4) *Le mouvement ouvrier au Japon* (Paris: Felix Alcan, 1921); 5) *Le cœur japonais* (Paris: Payot, 1927); 6) *Contes et légendes du Japon* (Paris: F. Nathan, 1931)。
- (34) Felicien Challaye. *La Chine, le Japon et les puissances*. pp. 39-40.
- (35) 同上 p. 42.
- (36) 同上 p. 53.
- (37) 同上 p. 76.
- (38) 同上 pp. 91-94.
- (39) «Chalux», *Autour du conflit Sino-Japonais* (Bruxelles: Office de publicité, 1938), p. 28, 41.
- (40) 同上 pp. 6-9.

- (41) 同上、pp. 11-14.
- (42) 同上、pp. 54-55.
- (43) 同上、pp. 66-69.
- (44) 同上、pp. 105-106, 129.
- (45) 同上、p. 150.
- (46) 同上、p. 233.

（原稿受付 二〇一八年十一月一日）